



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990

発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

〈死者の日によせて〉

キリストの死と愛

今日十一月二日の典礼は、永遠について考えるよう招いています。典礼の朗読によると、「人とともにある神の幕屋(黙示録21・3)である「新しい天」と「新しい地(同・1節)の展望が私たちの眼前に開かれます。「神は人の目の涙をすべてぬぐわれ、死ももうなく、叫びも、苦勞もなくなる。前のものが過ぎ去ったからである。(同・4節)」

この光景は、今は主の御前で至福を樂しんでいる天国の多くの聖人たちにすでに実現しています。イエズスが約束してくださったように、聖人たちの栄光にいつか私たちも与えることができることを希望しつつ、今日はその栄光についてしばらく考えましょう。「私の父の家には住みかが多い、私はあなたたちのために場所を準備しに行く。(ヨハネ14・2)」これを確信しているから、死に直面する時、キリスト信者は平安を保

っていられるのです。それは死という現実に対する無感覚で無関心のあきらめによって起るのではなく、死が人生の終焉ではないことを確信しているからです。命は死を征服することができずですし、そうであればなりません。神の恩寵のうち生きるキリスト信者の希望・最終の目的は、死ではなく命です。聖書が記すように、永遠の生命とは、この世の命の限界を越え、死を越え、神の無限の命における完全で終りのない命のことです。

亡くなった信者を記念する今日、死という神秘に満ちた穏やかならざる現実について黙想しましょう。私たちは死という事実を、私たちの意識から、面倒で厄介なこととして排除しがちです。そうすればより平穩な生活が送られると考えるからです。重い病氣にかかった時でさえ同じように考えます。死についての考えが

起ると、自分や他の人々の中からそれを消し去ろうとします。そうすることによって思いやりがもて、憐れみ深くなれると思うのでしょうか。そこで私たちキリスト信者も自問しなければなりません。死について考えることができるだろうか。どのようか。死についていかに語れるだろうか。

使徒信經がしめす真理のひとつは死ではなかったのでしょうか。私たちの信仰が、死の意味、さらには死の価値について確かな光とこのうえない慰めとなる光を与えてくれるのではないのでしょうか。そうです。私たちキリスト信者にとって、死は価値あるものなのです。私たちキリスト信者にとっても、死は依然として心から逆らいたくなる否定的な現実であることも確かです。しかしキリストは死を、与える行為、愛の行為、

罪と死の奴隷からの解放の行為となさいました。キリストに倣って死を受け入れれば、永遠に死を征服することができるとです。

それでは、亡くなった兄弟姉妹のために何をすればよいのでしょうか。何を希望すればよいのでしょうか。全ての悪と苦しみから解放されるように祈ることです。それはキリストの不变の御言葉と聖書の崇高なメッセージが伝える希望です。キリスト教はあらゆる悪、とりわけ罪に対する勝利であり、「最後の日」には死と全ての苦しみに対する勝利となることとでしょう。

「主は私の光、私の救い、私はだれをばかろう。主は私の命の岩、私はだれを恐れよう。私は主に一つのことを頼み、それを求めている、生きていくかぎりずっと主の家に住むことを。(詩篇26(27)・1、4)」

地上の生活は死に向かう旅ではありません。それは命と光に向かう旅、神に向かう旅です。まず罪から始め、死は克服されねばなりません。

信仰による「善き戦い」を戦い、私たちより先にこの世を去った兄弟姉妹のために祈りましょう。

「主よ、永遠の安息をかれらに与え、絶えざる光をかれらの上に照らし給え。」

彼らを思い起しましょう。彼らが安らかに憩えますように。彼らが自らの労働と犠牲の実りを樂しむことができますように。彼らの苦しみが無駄になりませんように。「ずっと主の家に住む」という彼らの望みが実現しますように。祝福のうちに。(89・11・2)

この地上での私たちの解放は、罪からの自由によって始まります。この罪からの解放こそ、全ての基であり、全てに必要なことです。苦しみは、罪の償い、贖い的手段として残ります。しかし、神の恩寵のうちに死ねば、命と永遠の幸福に入り、靈魂はいつか再び死によって滅びた肉体をもって天国の幸福に与ります。

救い主が 来られるのは近い

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。

待降節第四主日の典礼の神の言葉を聞いたところです。私たちは毎日の教会の祈り(聖務日禱)で、「もうすぐ主が来られる」と繰返します。今日の朗読は、主の来臨の秘義を詳しく理解させてくれます。御父が世

に遣わされた御方は間もなく来られる。その御方は、預言者によって予告されていた待望の方、詩篇の祈りを実現される方です。今日の詩篇のように、彼は「神の右手の人」(79・17参照)、神の子です。

その御方は私たちの救いのための

しもべ、人々の回心のためのしもべとして来られるでしょう。事実、詩篇は信頼をこめて次のように叫んでいます。「われらはもうあなたを遠ざかるまい、われらを生かし、み名をこいねがわせたまえ。(79・19)」

世の救い主、新しい生命の創造主が間もなく来られる。

預言者ミカヤは救い主の生れる場所を知らせています。「エフラタの地ベトレヘムよ、おまえはユダの家族のうちで、もっとも小さい者だが、イスラエルを治める者がおまえから生まれねばならぬ、その出は、ずっと以前、昔の日々にさかのぼる。(5・1)」

感嘆すべき言葉です。救い主の生れる場所だけではなく、ずっと昔の日々、永遠に遡るその由来についても知らせています。なぜなら、その御方は神ですから、詩篇はたぶん神の子、神よりの神、光よりの光である救い主について預言しているのではないのでしょうか。

神は「イスラエルの牧者」であります。

神から来られる救い主は、預言者・牧者と呼ばれるでしょう。「彼は主の威光をもって立ち、神である主の名の権威をもって、羊の群を牧される。彼らはそこに住みつく。主はその勢力を、地の果てまでのばされるからである。(前出5・4)」

数から見ればイスラエル人は大きな民族ではありません。むしろ最も小さな民族の一つでした。しかし神の計画の中で、イスラエルは民族、国民、国家間の区別や境界のない普遍的な民族の初穂となりました。そ

れは人間を指しています。来られる御方は人間の贖い主であり、一人ひとりの、そして全ての人々の贖い主です。

彼は魂の牧者として来られる。彼の力、牧者の力は全ての人の救いのためです。この意味で詩篇は次のように呼びます。「イスラエルの牧者よ、…み力をふるい、われらを助けたまえ。(79・2、3)」

見よ、その御方が来られる。見よ、その御方は間もなくやってくる。ヘブライ人への手紙の言葉で、キリスト御自身が来臨の秘義を宣言されます。「キリストは世に入るとき言われた、『あなたはいけにえも供え物も望まれず、ただ私のために体を準備された。』(10・5)」

「御父のふところにおられる」御独り子の神が、このように御父にお話しになります。

間もなくやって来られる御方、ベトレヘムでの誕生をもうすぐ典礼の中でお祝いする御方は、世の贖い主として来られる。「ただ一度で永久にささげられたイエズス・キリストのお体のささげ物によって私たちが聖とされた。(前出10・10)」このために救い主は来られるのです。

救い主の誕生の地は、ユダの地、エフラタのベトレヘムです。御父は、私たちの時に彼を遣わし、人の子として世に送るために永遠の御独り子のために体を準備されました。

人の子は処女マリアからお生れになります。彼の地上での存在は、ナザレトの処女マリアが天使に答えた時に始まりました。「私は主のはし

ためです。あなたのみことばのとおりになりますように。(ルカ1・38)」

それは、マリアが信じた瞬間でした。そして、エリザベトはそれを称えて、聖母マリアがザカリヤの家を訪問した時、「ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は」(前出1・45)と声高く叫んだのでした。

マリアの信仰は、全ての人間に対する神の新しい契約の幕開けとなりました。これは、神の御独り子の血による厳しい契約でした。人間の体をとられた神の御子は処女マリアの子として世に誕生するのです。(…)

信仰と希望のたまもの

このように、今日の典礼は「主が間もなく来られる」ことを私たちに知らせています。(…)

降誕祭に、全ての人々、悩みをかかえる全ての魂を近くに引き寄せら

れます。主は、解放と喜びと平和をもたらそうと望んでおられます。主は全ての人々を神の家族、神の家に呼び戻したいと望んでおられます。

「兄弟の残りの者が、イスラエルの子らのもとに立ちもどる。(…)」彼らはそこに住みつく。(ミカヤ5・2、3)

皆さん、神のこの訪問の偉大さを深く考えてほしいのです。特にミサに忠実に与えることによって、御子が来られる時に主を歓迎するようお願いしたいと思います。神の民のこの集まりにおいて、主は私たちの上に超自然の賜を注がれるのです。だからこそ主は私たちを一つに集められ、御言葉と御聖体のパンを私たちのために分け与えてくださるので

す。この霊的な現実の中に主を捜し求め、御体と御血の奉獻において主と一致しましょう。

「主はまもなくやって来られる。」

主の降誕に向けて準備を続ける待降節中、時々次の詩篇の言葉を黙想しましょう。

「万軍の主よ、天から見下ろし、御目をとめ、あなたのおどろ畑を、御石で植えられた株を養いたまえ。」(79・15、16)

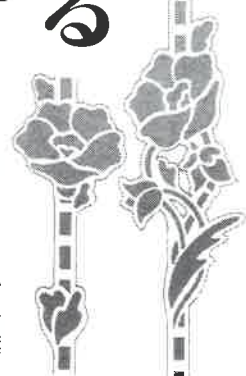
人類という土の中に、神は託身(受肉)の秘義を通して素晴らしいぶどうを植えられました。すなわち、私たちが彼と共に彼において成長できるように、神の永遠の御子・世の救い主を送られたのです。神が永遠の愛によって人類のために計画されたこの救いの豊かさの中で、神において成長させてくださるようお願いしましょう。

「主よ、み顔を輝かせよ。」

繰返し行われるこの典礼の中で、み顔を輝かせてください。御身の来臨の秘義がいつも私たちを新しくしてくださるように。

(89・12・18)

苦しみで人を助ける



キリストにおいて親愛なる兄弟姉妹の皆さん。

病人は、キリストの体である教会の大変特別な部分です。今朝、マルタとゴゾのお年寄や病気で苦しんでおられる方々の代表とお会いできて嬉しく思います。皆さんへの挨拶にあたり、ベトロの第一の手紙にある

次の美しい言葉をもって私の言葉とします。「キリストの苦しみに与れば与るほど喜べ。そうすれば、あなたたちは、光栄のあらわれの時、喜びに喜ぶ。(4・13)」この地上における私たちの生活につきものの試練や苦難の只中にできえ、様々な方法で私たちの希望を強め、慰めを与えて

くださる全能の神を真に賛美しましょう。

くださる全能の神を真に賛美しましょう。

病人への教会の心遣いは「民の中のすべての病、すべてのわずらいをお治しになりながら」(マテオ4・23)御国の福音を宣べ伝えられたキリスト御自身の模範に倣うものです。イエズスは多くの奇跡によって、神が私たち一人ひとりのすぐ近くにおられること、そして信仰において主を呼び求める者に、癒しと救いをもたらす神の力がいかに偉大なものであるかを示されました。教会は長い間、病者が肉体的および精神的に必要としているものに奉仕しながら、キリ

「聖なる口ザリオ」

(改定新版)

ホセマリア・エスクリバー著
精道教育促進協会スタッフ訳
定価一三三六円

説教・講話・書簡等の抄訳

ストの救いのわざを続けるよう努めています。教会は、神の慈悲が弱さのうちに完成され、苦しんでいる人においてキリストの十字架の救いの力が精神的に現存し、働くことを知っています。

ここからさほど遠くない所に、民間伝承によると聖パウロがマルタに滞在中に住んでいたとされる洞窟があります。ご存じのように、聖パウロは福音のために耐え忍んだ多くの苦しみにおいて喜びを得ました。そして、キリストと共に苦しむことによつてのみ、私たちがキリストの復活の力と共に与り得ることを理解しました。(フィリッピ3・10、11参照)

私たちのカトリックの信仰によると、諸聖徒の交わり(諸聖人の通功)において教会のメンバーは互いに深い精神的な一致で結ばれています。私たちの祈り、苦しみ、喜びは神のみ完全にご存じの方法によって他人に影響を与えます。恩寵の生活を通じて、私たち一人ひとり、兄弟姉妹が必要としているものに十字架の救いの力をもちたすためイエズスに協力する機会が与えられています。聖パウロ自身が教えるように、私たちは「キリストの体である教会のために、キリストの御苦しみの欠けたところを満たすこと」(コロサイ1・24)ができるのです。

人々は病氣や苦難を背負っている時、しばしば自らの問題だけを考えたい気持ちになります。しかし信仰は、私たちにもっと深い見方をせよ、そして、苦しみを全人類の必要のために神なる御父への喜ばしい犠牲としてイエズスと共に捧げることによ

り、私たちが隣人のためにできる偉大な善を見よ、と招いています。今日、いかに多くの人々が私たちの祈りが必要としていることでしょうか。私たちは家族や友人のために祈っている時、または諸国間の平和や個人的な協調、あるいは飢餓、病、麻薬等の問題解決のために祈っている時、祈りは聞き入れられることを確信できます。

親愛なる友よ、(…)お年寄や病人に奉仕している人々や団体に対し、

◆十戒
神が十戒をお与えになったのは気まぐれではありません。キリストがより完全にしてくださった十戒は、キリスト者の個人的・社会的行いにとって、いまも変わらぬ基本です。(77)

◆秩序
神との正しい秩序や他人との秩序を守らない人は、自らの利己主義の殻に閉じこもっているわけですから、自分の中の調和はおろか、周囲の世界の秩序も得ることはできないでしょう。(78)

◆人間の尊厳
人格の尊厳の基礎づけをするのは創造についての真理です。(79)

人間は、神に造られ、目的を与えられ、他の何ものにも優る尊厳を与えられています。(79)

◆真理と倫理
真理は倫理の尺度です。選んだ事柄と動機が倫理的に良いと認められるには、それらが客観的に善といえ

この場をかりて特別の感謝の言葉を申し上げたいと思います。政府機関と共に教会の数々の組織は、献身的な奉仕を続けておられます。また、お年寄や身体障害者、あるいは麻薬中毒回復者のための家で、教会は社会の精神的、物質的な幸福のために著しい貢献をしています。そばにいて愛の奉仕をしながら、お年寄と病人を慰め支えておられる多くの家族の方々、友人、ボランティアの人々へも私は思いを寄せます。困っているものと合っていないければなりません。(80)

◆キリストの真理の本当の意味を理解してもらうため、(愛と)一つになった真理として宣言し、生活に生かすようにしなければなりません。(80)

◆イデオロギーが人々を分裂に追いやるのに対して、キリストの真理は兄弟愛へと導く愛のうちに実現されるものと合っていないければなりません。(80)

◆貞潔
貞潔や純潔に反する罪が人間の尊厳に対する侮辱であり、生命への攻撃であり、愛に対する裏切りであることを納得しているでしょうか。(82)

◆愛・聖心
愛するとは与えることを意味します。愛するとは自らを与えること、

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)



「召しだし」(再版)

ホセ・ルイス・ソリア著
新田壮一郎訳 定価七〇〇円

る兄弟姉妹に対する皆さんの寛大さと思いやりは、良きサマリア人の姿を映し出しています。(ルカ10・30、37参照) その隣人に対する思いやりは、深い愛と連帯の印でした。「救いをもたらす苦しみ」(28)

◆神との出会い
神は来られる。しかし私たちが留守にすることがある。神は待合わせをすっぽかされぬ。危険は私たちが、神と出会う機会を失うこと。(87)

◆教会
(教会の感覚)をもって生きるとは、教会を知り、愛し、(教会と共に感じる)ことを意味する。(102)

◆女性
女性一人ひとりは、「その存在自体を神が望みになった、この地上における唯一の被造物なのです。」一人ひとり「最初から」女性として、人間の尊厳を遺産として受けています。(104)

◆教会
(教会の感覚)をもって生きるとは、教会を知り、愛し、(教会と共に感じる)ことを意味する。(102)

◆女性
女性一人ひとりは、「その存在自体を神が望みになった、この地上における唯一の被造物なのです。」一人ひとり「最初から」女性として、人間の尊厳を遺産として受けています。(104)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

れた時でさえ、聖母は神の約束が成就されることを固く信じて疑いませませんでした。このことから、マリアは確固たる信仰、希望、愛をもって神につき従おうとする全ての弟子の模範です。神の無限の慈悲とやさしさに深い信頼を寄せましょう。そして、聖母マリアの月(にあたり…)苦しみ、重荷を担う全ての人々が主の永遠の勝利を知ることができるよう、マリアと共に祈りましょう。(90・5・27)

◆教会
(教会の感覚)をもって生きるとは、教会を知り、愛し、(教会と共に感じる)ことを意味する。(102)

◆女性
女性一人ひとりは、「その存在自体を神が望みになった、この地上における唯一の被造物なのです。」一人ひとり「最初から」女性として、人間の尊厳を遺産として受けています。(104)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

◆キリスト
人生で真に成功するには、イエズスの意向を知り、それを行うこと、イエズスが言われることは何でもする必要ががあります。(106)

◆犠牲
イエズスの模範に倣い、私たちが体で祈りを捧げよう。節欲、隣人への愛、肉体的苦行など、努力を要する難しい行いは「キリストの苦しみ」と一つになって、償いとして神に捧げる祈りと犠牲になります。(106)

◆自由
にせもの自由を惑わされないように。やりたいことだけやる、経済的にできる限りのことをするというの自由は行動する人とは言えない。他の人を押しつけて自分の希望を通しているなら、決して自由であるとは言えない。(93)

不変の教え

罪は人間を疎外する

「罪」シリーズ⑨(つづき)

1 (しかし)物事を偏見なく見てはつきり言えば、啓示と信仰に照らした時、疎外の理論は逆転されるべきものと言わねばなりません。

人間を疎外に導くものは明らかに罪であり、罪だけなのです。そもそも始めから、ある方法で人間が他ならぬ己れの人間性の「相続権を奪われる」ようにしむけたのは、明らかに罪なのです。罪は様々な方法で人間の尊厳——つまり神の似姿に創られていること——の決定的な要素を人間から盗み取るのです。全ての罪はこの尊厳を(滅らすのです)。人間は「罪の奴隷」(ヨハネ8・34)になり下がれば下がるほど、それだけ神の子の自由を享受できなくなりま

2 罪は「神に逆らう」ばかりでなく人間にも逆らうものです。第二バティカン公会議が教えているように「罪は人間そのものを弱く小さくし、人間をその完成から遠ざける」(『現代世界憲章』13)のです。それは論証する必要など全くない真理であり、一見するだけで十分わか

3 これについては、聖トマス・アクィナスの考えが思い出されます。彼は、「人間が行ういかなる倫理的善行によって善くなるのと同様、人間のするいかなる倫理的悪行もその人間を同じように悪くする」(II, q.55, a.3, q.63, a.2参照)と言っています。従って罪は、本質的に人間にふさわしいものである善を破壊します。罪は人間固有の善を人間から(奪う)のです。人間自身から(強奪する)とも言えます。ヨハネの福音書でイエズスが説くように(8・34)、この意味で「罪を犯すものはみな罪の奴隷」なのです。これは明らかに(疎外)の概念に含まれているものです。従って罪は理性のある自由な人間を真に(疎外するもの)だと言えます。理性のある人間にとつては真理を追求し、真理に生きることはふさわしいことですが、罪は善についての真理のあるべき場に真理でないものを乱入させます。罪は(見せかけの善)のために真実の善を排除します。(見せかけの善は真の善ではありません。なぜなら真の善は排除されて、(にせもの)に場所を譲ったのですから。

4 すでに明らかのように、人間の真の疎外——神の似姿に創られた理性のある自由な存在の疎外——とは「罪の下にあること」(ローマ3・9)に他なりません。聖書は罪のこの面をはつきり強調しています。罪は神に(逆らって)いるばかりか、同時に人間にも(逆らって)いるのです。ところで、もしもその論理から、また啓示から、罪が適当な罰を要求するということが事実ならば、この罰は始めから他ならぬ罪そのものによって構成されているといえます。罪を通して人間は自分自身を罰するのです。ある人が言ったように、罪には、罪そのもののもつ内在的な罰が含まれています。神の欠如ということなのです。それはまさに地獄なのです!

5 人間が自ら罪におちるにまかせたことは、明らかに人間の人格の疎外としての罪の意義をこの上なく雄弁に説明するものです。とはいえ、人間がそれに気づいている間は、人間が罪の意識を保ち続けている限りは、悪は完成されてはいませんし、少なくとも、癒されないこととはありません。けれども、この罪の意識が欠けている場合には、倫理的価値の完全な崩壊は避けられず、破壊の危機が恐ろしい現実となって人間に近づいてくるのです。ピオ12世の厳粛な言葉(もうことわざのようになっっています)を常に思い出し、熟考しなければなりません。「今世紀の罪は、罪の意識を失っていることである」(Discorsie Radio-messenger, 1946, VIII, 288参照)

聖書は、この疎外の概念の三面に触れ効果的に強調しています。つまり罪人は、己れ自身を離れ(詩篇57・4参照「罪人は胎にいるときから迷い」、神から離れ(エゼキエル14・7参照「私から離れる者」、エフェソ4・18「神の命を離れた」、社会から離れる(エフエソ2・12参照「イスラエルの市民権もたず」)のです。

罪は恐ろしい(破壊的な力)です。すなわち人間と人間社会の生活の善を、惑わし、容赦ないひどい悪意で破壊するものです。このことを真に理解するためには、内的であれ外的(社会的、歴史的)であれ、経験を参考すれば十分です。ですから、(社会的罪)について当然語ることもできます。(『和解と悔悛』16参照)

罪によっておこる疎外は、認識の領域に触れますが、むしろ知性を通じて意志に影響を与えるものです。その時に意志で生じる事態は、聖パウロのローマ人への手紙の中で最も正確に表現されているといえます。

「だが彼らは、ほんとうに私を傷つけられるだろうか。いや、むしろ自分のため、自分の顔を辱めるためではないのか(エレミア7・19)と預言者エレミアを通して神は仰せられます。「おまえの罪自体がおまえを罰し、おまえの逆逆がおまえをこらしめる」(同2・19)と。預言者イザヤは次のように嘆き悲しみます。「みな、木の葉のようにしほみ、風

のように悪に運び去られた。(…)それは、主がみ顔を隠し、罪におちる私たちを見すごされたからだ」(64・5(6))

「私は自分の望む善をせず、むしろ望まぬ悪をしているのだから。もし望まぬことをするならば、それをするのは私ではなく私の内に住む罪である。そこで、善をしたいとき悪が私のそばにいる(…)私はなんと不幸な人間であろう」(7・19(21、24))

人間は罪を通して自己を罰する

「だが彼らは、ほんとうに私を傷つけられるだろうか。いや、むしろ自分のため、自分の顔を辱めるためではないのか(エレミア7・19)と預言者エレミアを通して神は仰せられます。「おまえの罪自体がおまえを罰し、おまえの逆逆がおまえをこらしめる」(同2・19)と。預言者イザヤは次のように嘆き悲しみます。「みな、木の葉のようにしほみ、風

「私は自分の望む善をせず、むしろ望まぬ悪をしているのだから。もし望まぬことをするならば、それをするのは私ではなく私の内に住む罪である。そこで、善をしたいとき悪が私のそばにいる(…)私はなんと不幸な人間であろう」(7・19(21、24))

『教皇様の声』

- 年間購読料(1~12月)のご案内
年間ご購読料は1部 900円です。20部以上まとめお送りする場合は、送料は無料となりますが、1部から19部まではどの場合も600円となります。たとえば3部お送りする場合は、900円×3部+600円=3,300円
教会宛2部以上まとめお送りする場合は、送料は無料となります。
- ご購読料は郵便振替にて、お申込み下さい。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費

■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393